863
特別
145

捲簾

春花四

国立国会図書館　タイトル『捲簾』 請求記号 863-145

ガラス使用

八三一四五

樂只俳道雪也月也花也
皆俳也各隨其所見相與
唱和唫詠賦雅懷者誠騷
人之事而至專主張聲伎
遊宴為淂雪月花之趣則
非同日之談一日見清人
魏惟度題八居詩而感嘆
其人富風月越作俳句叩
述八居之趣矣

掃月閒人弄花自書

達堂野口氏

捲簾

弄花撰
元文二年

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145
ガラス使用

八居題詠

山居月	船居月
巖居雪	水居雪
樓居月	村居月
廓居雪	第居雪

元文二丁巳年初冬日

周二 [illegible]

第一

月影や垂掃かるる掃の上　掃月

林廉ゝなる迄うる里　松尉

影指の織人よ金を見せうまて　[illegible]

うゝしゝと時を下戸も一雲　[illegible]

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145

ガラス使用

靈山寺より静よりの簾　滝水

まこと中うに精舎の峰　堂

釈迦（シツヘイ）の如くに小滝の所に　寺

蜻川殿の折の章　月

きのふ降るきのふ降り降りて　堂

新緑を味噌と搗き殿　水

あれらのの言ひ出せば尽きず　山

茶屋ゆきとて　竜門流　寺

朝毎に我ら　ゆく峰　水

鉢さん入まで名い出る所　山

めでたまふとかりくいでて　坊主　月

拝神参る　寺　宮　寺

髪結の家い掃田る茶屋あり　寺

やくしの神も　水

葉とふり極る月雪の姿ひとす　越

蛍くれ蛍くれひと世い機嫌る　月

錦百ちゃ無彼岸桜まかれ　光

志仙てるふるまゆ面の花　雪

白めれ孫帽子い皆ちん泉　水

ゆる日和とゝの山ちめき　越

ウ

第二　弄花

岩ふるの鍋みりとり雪と炭

答れあとひと呪く谷川　行月

小姓ものゝ様の墨中れて　杉雪

夏の陰ぬうきふれ出走　南枝

蕭蕭ゝ荒れて行の月　葉林
講釈ゝ世ゝ鈴ゝ雪ゝ時　雪
光ゝ百ゝ年ゝ経ゝ月　月
神ゝ言ゝ葉ゝ玉ゝ ふ立　林
あゝ雲ゝ桜ゝ咲ゝ　雪
曲突ゝ人ゝ知ゝ竜ゝ　花
ゝ陽ゝ ゝ ゝ　枝

ゝ名ゝ ゝ ゝ 接ゝ積ゝ　月
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ　林
茶湯ゝ ゝ ゝ ゝ井戸　枝
ゝ空ゝ ゝ ゝ ゝ時ゝ　月
寒ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ　雪
小波ゝ沖ゝ ゝ ゝ ゝ　花
三保ゝ向ゝ ゝ ゝ ゝ　林

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145
ガラス使用

紅葉吟けとも月は聊一　枝

古郷へ廉のよ第五義入　月

お稽とうと南ていいやる鶯のはは　雪

咳嗽を滿い尺無と勝ちて　花

京香話吟ひて一花る西陽　林

紙書るゆゆをてのけふ時風　枝

第三　掃月

高樹を横筋の初月和

横にとくまてうらうらう　蕎東

百人首物と神の春めて　民也

乳毎いやめと取く枝折戸　翁白

我年ハ七ツ之やうなる時ハ　次雑

いかなるはやん重ハあるなり　也

市ハ市と立てあるハいかく川御　原

分町うも繁る御城　月

伝源氏の部ハ人目ハ関ハ　也

物ひおるとは首戸の張物　雑

隠うゝ義ゝうをとるるハ　白

うんふ射猟ハ幕供砺ハ　原

妻ハ自牧ハ妻ハ名と物ハ　雑

等ハ亜とハ名と国ハ　白

出亜ハ出ハ妻ハあるハ物ハ　原

日ハ義ハるハ内のうハ　也

塩ハ物ハ栗ハ中ハ夏柳　月

宗旨物ハ物ハ隠めハ　雑

月の入れる西国あれたる橋　白

相撲取ならぬ人なりとも月

聖ふしてゝ高きへのやまの上タ　北

他所の川うちへ人渉見舞　東

孫白の玉川向の花も紅とゝ　雑

風北雲集る鎖のちらす　白

第四

酒賞北大事を駆くや竜の雪　春花

別事あり邪よりの風ひとし　九鐘

夏ごとく弛るの和歌ふ月の時　桂枝

年暮ぬ春ちは中清まる　君山

元ちかうかいかるなるまつ　林泉
四中の雲よりとる明　枝
蔵人はあれい孫の娘や　鐘
二拾貫目い出すを賀　泉
こそこそ日と国尾作る湯桑の原　枝
梅めの鶯まうしひまいぞ　花
おいに兵庫はしろのもむもむしは　山

古仏めはかれて離と一対　鐘
雅とぬむ足りうく新日新　泉
小野まいるは嫁くなりてや　山
世の中い稽よ苔よい一生咲く　鐘
這入まい無のちの和歌　枝
塔人も紫苑一折て俳句宴　花
祖代時あれ市月は壊さも　泉

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145
ガラス使用

押つけ蒙れひとり山
ゆふ清るる時雨の色の錦
九谷のむきちらして桃の枝枝
清を鏡てもてふれる元花
素盞嗚の大和河内のむかし泉
瑞引たえてなつかしき畑打山

第五

掃月

岩根ふる稲の波や月の氣
原は稲妻と芦の遠き 翠羽
雪のうちとおく筆の雲まもて 炼陽
市人も雲は鐘の音なるこ 專安

大寺ちかきうへの山おろし　石矢

雲居ひとしかりしつもるつゆ　頃

紅葉ばかりなる姿と俗文よ　羽

世い節をいの拍子せりき　月

遠寺といへと遠尾ちかき　頃

春れ行来ようもと紫橋　矢

雲雀笛ふりてもれて奥遠　芳

ちる羽織のよもすがら　羽

俗言も分い郭れ愛言葉　矢

雪ぬりて行時ものてるそ　芳

そ部屋れちる雪のそりいて　羽

新れ分ふる神ふ鶯口　頃

鶯ふりて姉よ姉の姿ふ　月

三味線弾の飛うくよ生　矢

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145
ガラス使用

春秋は夜の中なる屋は月　源
見へ世い事度金子と盥とも笑　月
きてうさとまること鍋のかりうさ　功
子安条りと春あい事度面　羽
空癖と花は氣きよ毎はくへ　矢
はくうちゆきぐ世きうめ世の事　源

第六

雪は月毛奥も鈴はは望は義　春毛
羽風は笑ふ鶯は鶏も　汁夕
あの鐘い撞ぬと恋は極りて　五茅
神とうへまも祖父の業用　青生

夕月は毎年いやとしの初め
空まで陽ふ雲霧の茅
龍膽とわすれて叫ぶ夕
又ふる年の月は雄釈迦
須臾爲と会いうて知れる茅
陽あ我ひよかの蒙れ下
なれとてはれたちくもの雲
生

東風は野中い英を吹う
大殿を半蝶を見れいとる
事もなろうや百重
生駒うとめく雑波の和田
仲秋めて方よも鈴
鐙ひるい面目もなき女中
夏ける清もとみ乳の垣

夕
あ
生
夕
茅
も
あ

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145
ガラス使用

ウ

出て行るうちい涼しさを言み月　生

庵りいてる新しん足とり　夕

なりけるといふあれるす　芳

直比源も三寸と何まらるこく　也

入新月見る赤の元　お

蕪のあれい面へひらへ　生

第七

掃月

蝿と蚤ふ枝のおもも月ひ宮

枝ふと百まて鞠白のこと　長汀

虫特ち女中も思ひ足みて　宗二

面ち晴ても無よとわり　常春

礼はまた明く出船の戸折戸　野笛

狸う猫と南は来るけふ　二

風は吹き外はあるもそう　汀

新しるのいのもとのあり　月

きまつはれて蛙も活れと猫　二

宮まも作法い第向ひなり　笛

地れたと義は日和の帆を舟　泉

此ころ雲るい皆ひて朝　汀

ものもあれいたれ春く　笛

九番ものの乳は白彩　泉

ちちの出深は所のひる　月

庄屋のしと訪は昨晩　二

田舞取り鶯は左猫と初　汀

ちまは来たと梅干は厨　笛

月のあなと疑ふれ星月夜　高

望て居れば柿の渋けり　月

野寒し遠ひもとと里の雪　二

飛鳥の詩人て蕎麦の名　汀

ももきよ節供とうけて咲急き　蕉

桃も向ひよ移れ春柳　高

ウ

第八

雪をうよ花をうらうよ第う術　美蕉

紙ふまもまを拾ふれあ俳連　杉湖

いぬ〳〵ぬとけと出書と下ぬれて　童生

蝶よ申ふアよ秋う一重　駐夏

山里の月は粧更亭を物り　亭水

稽古湯は雪かも流れ　牛

一筋は涙世大るもと弱の糸　調

人の世界は鼻毛のひと　丸

咲もむ兵庫より此神幕　面

安井よりまれ着い着板　調

なるまでも南なれの乃者達　牛

日もてらくと赤んお蚕　丸

汁の実い何すと肖戸とあちら　丸

ゆえ西いるれ来て西い無時　面

大呉此髪を仕舞へ又小呉　調

楽人衆の勝ハ追く　牛

お菓ふちる遠と本屋よ　丸

月いおく拍黄の入れ　調

明の色い四季をこうり　朱

尼よ子〳〵ゆてはぐる蕗針　秀

清おう〳〵ゆれはうれて酒一ツ　面

なよと信濃のかゝ宮姫　邦

山いまさ林藤のもとをうぬ新　子

雑子の見えうる雲よ新　面

四季混雑

ナツ

夏〳〵きひ枝めりる雷の鍬　乙中

南か〳〵野と摘角〳〵ま子菜作　麦阿

切の稽うけても伊や和ま　宋鶴

けをとも子ま咲うて雨うり　山和

麺釣る母や入れおらひ形り　杉湖

とく雲も流り山れ蕗紫ふる　地流

瞬八や七夕なるを初るを時　大和　茶煙
石川や新の光るを砕しし　乱紫
紫の戸より箭と乗る月あるる　長汀
月ゆるはやし川音よつ雲花弁　荷風
彩きりと合点て咲や春の雲　乗祝
月よさ人命のもつ風や神送り　至芳
箇代より煙や舞ひて鳴る屋　公羽　風仲
唐砧月と我ゆ新るはそめる、　厅石

ほしゐや副梁れ松よ立佛を、一戸
新霧と点の行とわるを弁、燕志
立乱の笑よや樣のゆれ足、　音明
雪雷よ惜ひ〳〵くや水仏も、　面柳
咲涙よ多れの星ぬ〳〵るる、　李夕
花よや乗よ立かる音立う〳〵　夜物
拂よも取ばさ立ほよ弁　暁星
雪物や立れよれの色　滝水

一日の人よ磯よりて月　十子
暮すもあるて墨るや鶯の聲　蝶陽
鶯もちとよんよりて哥　新葉
見廣う面白と初めぬ　翠羽
鶯や流れて水よ浮世第　沂風
寺院よあ種ひて
かちよりよりりや月　巴静
り姉と清て天れ晴る、　跡有

杉書
杉文
彩文の秋とくなれて文るれ、　春波
るもよ尾鶯の年小鮎る　竹外
我意ち川白ひなる蛍　汁夕
古秋よもとりとや郭公　文仙
扇屋い家の貴折る昌る　呂桂
菖蒲葉や風よ尺也る涙裏　希代
秋雲てよりとはあるれ牡丹　桃雖

姫松や春てふよをもあそび連　民也
風やうるふ誠の春の初と書く　風夕
相俗よ詩を時々や祖代書　松封
新年や明石よ毎月天満宮　加賀　帝国
文月の廻るよ蔵る一歩うれ　同　千代
和丁の乃よ物をや降れ月　上総　西坂
笠ひろげうらふれ雨雲雀、　君山
夏乙女よ頬あからをや新日新、　常与

水茎は一書錦や今ふるる、　青牛
とのの尾よ筏ひりとんれば、　専安
如此者ハ孫よ如者る稲うる　青牛
宗匠や如ようまれ歩の鶯ひ　青原
うり名はとくひ内よ手和程　宗こ
山吹や蕊るようれて実とられ　板牛
はるれてうる尾と振る柳る　葉林
蕚や樟孫てあ孫よ川の上　漁舟

猶書や為れ雅も暗れより　三信　沢雅
星合や牛も合点れあらん　同　林泉
夕立や瀬を隔てる入川　信濃　石矢
山れうに見よ紅れあるる、　和石
鶯の機も頃よ白雲の梅、　野菊
岩よ瞬うけて咲ぬ春はし　如雪
垂なれよ曲を行や名花　行月
横紙と月よ入せてやうて　紙水

かりうや石よ小鮒の浦ん　桂枝
三日月やまさ比義よ実もの　越後　湖雪

東武葛飾の
松尾芭蕉と称して

門柳の葉よ一ふくれ　同　此枝
引掛れ月よ一ふくれ　同　紫中
義人や雪春の祝よ　敲氷
あれよ山人よ月よ大根引　九鶴
うり菓よ実ぐうう胡蝶る　秋雲

源氏あるまれ　帝　俳雲
桂のまよ　桂もて　くれゐ　蘭泉
あるやうき　藤よ　紫　於て　の家　甲斐　羽摇
待ひ　ひ　ひ　帰て　時　る、　和猶
夏　月の　くも　なさ　や　宵雲、　秀丸
稲の　羽よ　口ち　くも　と　桂　泊、　千歌
あこう　京へ　遠る　て　時　る、　塩車
夕　乳の　ひて　て　京し　片　新戸、　白芳

寺　行　池　寺　ふ　桂　泊　る、　一林
あちこち　紅　て　角　泊　、　南浦
梅　き　や　光　よ　蔦　泊　、　志映
軒　あ　る　夏　と　春　て　り　雪の　弁　桃雛
き　梅　や　足　て　ぬ　桂　よ　き　星　も　咲　帝友
咲　春　ぬ　き　ぬ　梅　も　こ　り　て　十　泊　呂桂
屋　新　月　ま　ぢ　く　咲　や　波の　波　水戸　片泉
桂　ひ　り　一　稲の　蝶　り　麦　月　秋　終文　紫格

月の光えらびて人も思ひ種うる　愛才
時雨　雪菊
篠ぬけ出や義よ天遠を深見草　隆二
ちるもいはるる通のも　尾張　以之
あの面白て笑ひ出れ柳の邦　同　貞如
若れ戸の前やきて結ぶ文　同　百松
松陰よ帰るあゆ〳〵の夕ゝ邦　但馬　緑芽
和雪や益れちるよ松のひ　島谷

あ梅や浮遊れる蓑の泳ぐ　兎園
尺ようよ松路のくれゆくく山　春枝
名月のあるる帰るる　越後　司鍾
岩よ咲て酒よ義ゝ雪れも　駿河　掬月
黄馬の足より帰り初時雨　同　花三
明れよ岩ちうれ歳ぶ　同　一甫
夕立や八幡い三井の鐘牛　同　巨泥
淋ち中時雨の沈れ月の新　同　野芹

枝の花よりおもしろき柳　曰　文絲
雪ふりて煙り横たふるの嶺　曰　已白
笠の戸とうしくだまきの窮小　上総　秦居
谷川と取りて瀑や百合の花、　柏童
新雪ふり幕をひくや清水、　柳橋
青森なる中に芽ふきて蓬　柳里
特の間に訪ふ春の月あるる　麥阿
不二とみる俗や茅舎の窓　三峽

秋の来もはつるは仕舞ふや十三夜　白之
ちりぬの姫菊よ咲てもそれうる　巴雞
新日ふる三向て来るや河ふる　桃頂
入およ接崩ちれぬ桂う那　阿波　雅明
蟹を柳よ沙く　桃　北　曰　百木
三日月よ対て蕎ふて雪雁うる　時之葉　柳孫
ちりぬも剛毛序るなる初時毎　曰　兎陵
器よりも三さうよ世嵐う形　塚越　柳富

雅治卿来臨ありて

常いなの染と鯛ひてや蘭の花　義鹿

洲よりはなれぬるもの　日　達文

夏しらぬ雲もなるもぬ牡丹花　宗碧

りさとうるもの　女　美月

所のよれ屋やあるそ梁　女花

一面染て一染染るや張鳥　文水

秋山の秋やこるめて猫見　晴雪

海語よむより近くの柳うな　越後　北溟

ふる前に雪と明けるとぬ鳥、野ふ

孫ぬいる新年二八の面に、浮涯

初厂の秋いてり年稲葉山、其山

一むる北雪と前てあるに、不蔭

弱るや笑ぬ山も笑ハせ新　双鯉

動上げと雪のやうな川雛　南枝

屏風より湖とぬ広のよ雨　紅絡

かりがねと書まがふ雁やうへこそ　我兄
はくらうや塔の柳おいそこに初もえ　朱房
鶯はよそりのはくらや雑子ふる　越中　麻父
水をと花合せやうとうしゅう　同　之通
あるうちに芳りいそをさそる本ばくら　河越　蕙屯
ゆるひろ川廣うをとしゑふるる、　潛扇
鶯のぬをとくくさそり初あり、　宗徹
三月もあれくれの吸きりる、　翠輪

あまれう中は宮ふは猶やの桂、　亀鼎
杉枝は彩をぬせてぬくうる、　風乙
月氣と梅はところをそる鳥ぶ、　星楷
うを詠ふや畑打はるも猶史打　古鶯
紅梅やるも眼くぬくゆさ　蘭室
氣ぬをは陸るのくさるを鳥の香　翔白
書物はは物はり肥ッ半る　小田原　雅角
あそ学るるやも世の業輝詠　吉見　仙莫

行くて智恵もあるとて弁　山只（冷湯）
蕭と見て月よ角いるゝ春の月、　杜吾
桃花よくくるて雪しら房り梅、　范学
ふい軒端のいろくるる
（雨外と感められて）
腰ぬけの蛙よさく腊や恵ひ牛蒡　童草（美濃）
咲よりも蕾れとけめ寒れも、　有翠
初雪や日よ向くまる花ちらへ、　右範
天の戸れ笠おろよ戸ゝ子の月　稼仙（越後）

蝶も羽と合せて抱むれ初ちんぽ　谷水
猫毒れ猪（モジ）とうけるや糸ぬよ　瑠厄
山風と叫く蘇（ヒニ）て（ヒタス）る柳ちる　青暁
すぐ寒れ水よ七ゝ山やうきつる　春雲
ちゝ家や蘇よ行逢の名ちる　妙松（女）
清ゝ山と探りゝ七ゝ園の梅　柳江
多れ菓の破接よ多ちる　三湿（尾張）
神ち逢へ山ちあれ紫ふる月　巴蕉

沼まよ帆とあもて吹ち蓮汁　抱雪
解風よ過うもくて萩屋　蓮歩
鉢種に紅ち鶴より日ゆ　雅明
豆煎よ深めくたて　常陸　潤秀
芽外も鍋よ紅て　同　古淳
三日月やまんと蜘ゆ白く簾前　蓮貴
行刺りいあれさくまし芽よ塔を　玉風
風よ吹とくたれ風本紅茶神　七人　水花

浬槃会や抜れちう尚よ吹ゆ種　太羽
柿の殿ちゆ見重て茶紫うる　有芳
京菓や雪と殿よ抜の白し　亭水
ちう雪に百里ハちう流りる　豊後　傑俊　兼也
一面ゆ風も吹ゆて深の月　時人
体ゆて膝よ後合の茶摘る　同　泰川
抜に也の意深も白めて新汁　越前　玄駿
抜ゆて尾也ハ雪ぬちの菓　同　章吹

掃月庵にあそび八景と題詠
して其集を捲屋と呼ぶ
是その発句よき寓あり
ゑとをとゝ切りの月と
うやうし雪と苔むせし
ひかれらとよ負ふの心と
述ていはうとゝ侍るの

源氏行

麦阿

極あまる弱さのかやも一本
稚子雪に茶の香うやむ　吳也
髪寒いの重ねとなつれて　宗鶴
も搖ぶ　まもあるるく　瓢菓
月明く山の庵陰よりうう　涛要
ゑ柴に煽も風いぬるぬき　谷水

弱を話よう西瓜蜘蛛と酔あり　西坡
舟の美ヶ坂と見せるり蛾　夔才
はれひるを町もこらと　古鶯
新しき業の領そるとうる　桃江
帝掘て庶れて楽なる世るとも　子仙
笠う飛んて切りろん闇　双鯉
陰茎の叫も好いて養ひれ　左柳
頃裏茎てあちるを人　紅梅

天八のよもいろいろよりう　拙雪
余程湊よ集りと白砲　沂風
第目い月も蛙りおけ　行石
九日れ業のおりうう嘆　行水
也智もすく陰茎のる垂るひ　業
毋波よも今鬼いるれもる　要
鉞のよもはるよ春み秋　水
粗亭いロれあるにまりせて　鴨

第いても第よりやうなる簾屋の内
也
故のすゝ時うゝ重ねて簾おさ
語
御稼も無間いとちよ宮なの
す
ゆゑ知事よ事てゆ邪氣
阿
稼かろと銭よ小ちとゆひちゝ
紐
る早い時ゝて堂ゝ月天寺
雪
時厂もへ行ちんち安いゝ
詰
今ゝ此屋よ稼も十分
氣

お仲ゝて郎のちとぬむ氣
風
宗旨見ゝ負ゝ乗てもちゝて
石
京橋よりもとゝうる垣踏
貴
紫入もちゝて池新大敵
ぬ
あゝゝとやゝて寺の時雨
阿
家ゝ見ゝすゝと見ゆる吸物
梅
京稼ゝもゝゝ屋風の乗簾
語
大敵の寸よ寄ゝかゝゝ
水

筆用の時なりとうきを動れ月
江
なうしあらしも笠はれい猿
紫
雪とふるむも羽織よ頃うり
か
智恵よあさらぬるの入滅
も
三
あれ山はむ梅桜よ水を見れ種
香
と華もひとんな海士の苔蓋
鶴
飛鳥さんかとろくハうれ面や波
瑠
立春ひたるしもまるる
す

三味線の長いとう猿れ人待
れ
おとしおとしいるや祖父れ嘘
ぬ
紙張る牡丹うとい母ありうる
石
幕ち冥加よ叶の猿心秋屋
所
結ぶい何と世業れうさ
は
涉見よ抱れて雪ようを
か
湖もるうふ月れ明猿り
ぬ
加るよ新れ時叶て那よ
江

863
145

14179

扶桑分長千色見の法橋

名こそ和尚なれ〻開口　費

山中は茶屋とて水とすゝる　風

まつ日ち屋よるゝめる新　石

撰集もれよ花の咲く時　橋

白ひち菊よかるる枝の風　鶴

書肆　東門子藏板

遠堂鶯口氏

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『捲簾』　請求記号 863-145

ガラス使用